

5. パレスチナ／イスラエルにおける地域の重層性

白 杵 陽*

キーワード: パレスチナ／イスラエル、ポスト・シオニズム、建国神話、歴史的語り

Key Words: Palestine/Israel, post-Zionism, state-founding myth, historical narratives

- | | |
|---------------------------|-------------------------------------|
| 1. はじめに—地域としてのパレスチナ／イスラエル | 3. イスラエル建国史を読み直す |
| 2. パレスチナ／イスラエルに居住する人々の呼称 | 4. イスラエル建国神話をめぐる議論
[付録：質疑応答のまとめ] |

1. はじめに—地域としてのパレスチナ／イスラエル

私は東地中海の沿岸のパレスチナ／イスラエルと呼ばれる地域の今日的な状況を踏まえて、地域の重層性という観点から議論して行くわけだが、今回のシンポジウムで考古学的報告と現代政治の報告が同時に行われるというのは絶妙な組み合わせだと考えている。というのも、実はイスラエルという国家ほど現在においても考古学が政治的に利用されている国は例がないと言ってもいいのではないかと思うからである。また、私流の言葉で表現すれば、神話的言説を最大限に動員している国家である、という観点からは興味深い事例である。イスラエルあるいはパレスチナと呼ばれる地域も歴史的に見れば植民地支配のもとで極めて恣意的に形成されたものであるという立場から議論を進めていきたい。

最初に、私自身が本論で使用する用語に関して簡単に説明してみたい。まず、「地域」という用語に関しては、板垣雄三氏の議論を出発点として考えたい [板垣 1992b]。基本的には、いわゆるアイデンティティーの重層性と地域の形成の問題に非常に深く関わっている。現在の紛争の焦点として重要になってくるのがパレスチナあるいはイスラエルと呼ばれる地域である。この地域は紛争を媒介としながら、対立的に捉えられることが多かったけれども、最近の動向は、違う方向性を目指して進められているという印象を私自身はもっている。

* 国立民族学博物館地域研究企画交流センター

以下の点は、私が以前、地域研究企画交流センターで刊行されている『地域研究論集』に発表した論文と部分的には重複することになる [白杵 1996]。しかしながら、拙文とは少し違った観点から論点を提示したい。地域に関して、板垣雄三氏の議論を前提としながら、シオニストが地域としてのパレスチナをイスラエルとして排他的に囲い込みをすることでパレスチナ人をいかに排除し、沈黙せしめたかを、イスラエル建国、あるいはユダヤ民族史観に関する政治的神話の解体に関する最近の研究成果を垣間見ることによって、地域の境界獲得の政治性、権力と地域の重層性を逆照射することを本論の目的としたい。

換言すると、私がここで議論したいのは、最近起こっているイスラエルの中における議論の一端を紹介することによって、パレスチナ／イスラエルという地域の「新しい地域」として獲得される方向性を探りたいという意図をもっている。

2. パレスチナ／イスラエルに居住する人々の呼称

ところで、パレスチナ人にとってのパレスチナ、ユダヤ人にとってのエレット・イスラエルとは何か、という問題から始めたい。この点に関しては、周知のように、イギリスによるパレスチナ委任統治時代、つまり、第一次世界大戦後に確定されたパレスチナに住んでいる住民はすべて英語で「パレスティニアン (Palestinian)」と呼ばれていた事実がある。このパレスティニアンは「パレスチナ人」であるが、ユダヤ人にとってはヘブライ語で「エレット・イスラエリー (Eretz Yisraeli)」のことであった。パレスティニアンという英単語のヘブライ語訳が、イスラエル建国以前においてはエレット・イスラエリーとして流通していたという事実を確認しておく必要がある。ポール・ニューマン主演の「栄光への脱出」という映画にもなった『エクソダス (Exodus)』というフィクションがあるが、この本の原文を見てもわかるように、パレスティニアンという表現でパレスチナのユダヤ人のことを指していることが多い。したがって、パレスティニアン・ジュー (Palestinian Jews) という言い方が普通だったし、その対となるのがパレスティニアン・アラブ (Palestinian Arabs) だったわけである。

ところが、イスラエル建国と同時に、このエレット・イスラエリーという表現は使われなくなる。当然ながら、国家名にしたがってイスラエリーという言い方になったからである。つまり、この変化のプロセスは、イスラエル国家が建国されることによって、同時進行的にユダヤ人国家内における「パレスチナ」という属性がどんどんと排除されていくことでもあった。この歴史的事実は現在、われわれがパレスチナとイス

ラエルを、政治的には紛争対立的に、あるいは思考枠としては二項対立として捉えるということ自体が、イスラエルにおいて意図的に形成されてきた政治的な言説の帰結であると私は考えている。

パレスチナ人の排除は、パレスチナ人の存在そのものを黙殺する言説に由来している。1960年代おわりに、ゴルダ・メイヤー（メイール）というイスラエルの女性首相は新聞記者に対して「パレスチナ人は未だかつて存在したこともないし、現在も存在しない」と公言してはばからなかった。また、イズラエル・ザングウィルというイギリスのユダヤ人は「民なき土地に土地なき民を」というスローガンを唱えた。このような典型的な二つの事例は、イスラエル国家の正統性の観点からは、パレスチナ人は存在しないという言説、あるいは存在してはならないという願望をまじえた言説としてイスラエル国民に広く受け入れられることになった。

このような民族的他者の黙殺の考え方はシオニズム史のなかではけっして問われることがなかった。イスラエル国家のイスラエル人はパレスチナ人の否定的な媒介を通してイスラエル人としての国民アイデンティティーを形成してきたからであった。イスラエルにおけるパレスチナ人へのこのような黙殺は多くのイスラエル国民（もちろん、ユダヤ系に限られるが）に支配的であった点は確認しておく必要がある。

第二に強調しておきたいのが、さきほども少しふれた英語のパレスチナ・アラブ (Palestinian Arabs) という表現に関してである。この表現は普通、委任統治期のパレスチナ人を指す場合によく使われてきた。しかし、イスラエル建国後、民族的少数派としてパレスチナ・アラブはイスラエル・アラブという用語にとって代われ、1967年のいわゆる第三次中東戦争以降、イスラエル占領地、つまりガザやヨルダン川西岸のパレスチナ人との日常的な接触を通じて Palestinians、つまり、パレスチナ人という言葉に変わってきた。この現象はパレスチナ・ナショナリズムの成立と並行して現れた。

しかしながら実はパレスチナ人という呼称とアラブ人という呼称を、例えば、60年代の終わりぐらいまでは、PLO議長であったアラファト自身ですらも非常に曖昧で分節化されていない表現でしか区別していなかった。アラファトはこの曖昧さを率直に認めており、それを「(パレスチナ解放という) 革命はパレスチナという顔をもち、アラブという心をもっている」という比喩で説明しているのである。

第三は結論を先取りすることになるが、パレスチナとイスラエルを対立的に捉える捉え方から、パレスチナ、イスラエルという呼称の間に斜線を引いて表現する方式へと変化しつつある兆候に注目したい。具体的に文献を挙げると、ジョナサン・ポヤリ

ンという人類学者の著作である。最近、フィッシャーとマーカスの共編の『文化を書く』が翻訳された（紀伊国屋書店、1996年）。ボヤリンはこのような自省的人類学ともいべきアメリカにおける新しい動向に強い影響を受けながら、『パレスチナとユダヤ史』[Boyarin 1995] を著して、紛争という現象を人類学として記述の対象とする試みを行っている。ボヤリン自身はパリに移民したユダヤ人たちのアイデンティティーの問題を、歴史と記憶というテーマに絞り込んでフィールド・ワークを行ってきた。ボヤリンは、私がエルサレムに滞在した同時期に、つまり1991年から半年間、パレスチナ／イスラエルでフィールド調査を行っている。彼は自分のフィールドノートをそのまま公開する体裁をとりながら、折りに触れて書いて来たエッセー3本を挟み込むかたちで、例えば、エドワード・サイードとの対話だとか、アントゥーン・シャマースというヘブライ語で小説を書いている、現在はミシガン大学で客員教授をしているイスラエル出身のパレスチナ人との対話などを、オムニバス形式で取り込んでいる。そうすることによって、戦略としてその記述の断片性を積極的に前面に押し出して、エッセンシャル的な立場を回避しつつ、自己のアイデンティティーを固定的なものとはとらず、常に形成されていくものとして考察している。ボヤリンが頻繁に使っている表現がこのパレスチナ／イスラエルという地域呼称である。

ボヤリン自身はユダヤ中心的な考え方から脱することはできないにしても（むしろ重要なことはその限界を彼が率直に認めていることだが）、対話ということを通じて、大局的にはある種の共存／対立の状況を描写できる、つまりパレスチナ／イスラエル民族誌が可能だという立場から議論している。これはパレスチナ／イスラエルという研究分野では比較的新しい研究方法である。人類学者自体が自己解体的にフィールドの中でやっていくという、アメリカにおける人類学自体の解体を意識している。このような方法論を踏襲しながら新しい斬新な方向を目指しているパレスチナ／イスラエル研究も生まれているということを再度指摘しておきたい。

パレスチナ／イスラエルという表現の場合、いわば斜線のもつ曖昧性の重要性を示していることはすでに指摘した。つまり、その曖昧性とは、離散したユダヤ人のコミュニティーを一方の極に置き、また離散したパレスチナ人のコミュニティーを他方の極に置くとすれば、イスラエル人はあくまでその一部に過ぎない、というのが第一に指摘したい点である。もちろん、パレスチナ人という場合も一枚岩ではなく、パレスチナ人は現にかつての委任統治領パレスチナという土地に住んでいるという歴史的な意味でのパレスチナ人と、そうではない離散の地に住んでいるパレスチナ人をも包摂している。つまり、言葉の第一義的な問題というふうに考えずに、ある種のアイデン

ティティーの重心のおきどころによってこういうさまざまな表現の幅が可能となるようなスペクトルのなかで他者との共生ができるのではないかという提案である。

特に微妙な問題は、イスラエル・アラブ人という表現とイスラエル・パレスチナ人という表現である。最近イスラエルに住んでいるアラブに関してはパレスチナ人というふうに自分たちを自称し始めている。ところがこの二つのグループは実際には同一と言ってもいい。言語という側面から言えば、彼らも基本的にはバイリンガルに近いからである。つまり、日常生活の言語としてのアラビア語を使用するという状況があり、またイスラエルという国家に生きる者として、言わば生活の糧を得るために必要に迫られて使うヘブライ語という、そういう言語的なレベルの二重性である。このような言語状況は彼らにとってのアイデンティティーの問題と非常に密接に関わっていると思われる。その意味で斜線がまさにその両義的な曖昧性の中心になるという私の立場が出てくる。

3. イスラエル建国史を読み直す

以下において、二つの政治神話の解体に関する、最近の研究動向を紹介することによって、パレスチナとかイスラエルという枠組みを、少なくともイスラエルの側から解体するような方向が生まれつつあることを念頭において、地域としてのパレスチナをもう一度、考え直すことにしたい。

まず第一点はイスラエル国家誕生に関する神話の解体である。私自身、これについてはかつて「イスラエル建国、パレスチナ難民、およびアブドゥッラー国王—1948年戦争をめぐる修正主義学派の議論を中心に」[臼杵 1994a]という論文で書いた。簡単にこの修正主義学派というのが一体、どういう文脈でできたかを説明しておきたい。この問題に関しては、アラビア語とか、パレスチナの側から歴史を研究している人間にとっては、こんな当たり前のことを何故今ごろ議論するのだというような感じがなくもないが、しかしながらこれがイスラエルのアカデミズム内部から生まれて来たということに重要性がある。というのも、今までの国家誕生にまつわる神話的言説、すなわち、労働党政権がシオニズム運動の主流になっていたときに作り上げられた理想的な建国像の再検討という課題があるからである。

その建国イメージとは、非常に単純な言い方をすれば、ゴリアテに立ち向かうダビデ、つまりアラブ諸国という「巨大な怪物」に対してダビデたる「少年」イスラエルは果敢に闘って勝利したというものである。それがイスラエルの誕生というのを正当

化する一つの語りだったが、それに対して修正主義学派の人びとは、歴史史料を駆使して—イスラエルにおいて70年代に公文書公開法ができて、30年経つと、防衛に関する特定の文書を除いて外交文書を含めてほとんどを公開することになり、その法律により46年から48年に関する史料が公開され始めた—新しい研究者たちが、新しい歴史叙述の試みを始めた。若い世代とは具体的には、日本でいうところの全共闘世代の人々であった。つまり第二次世界大戦が終結する前後に生まれた人びと、第二次世界大戦が終わって、イスラエルが建国される前後に生まれたような人びとによって、新しい歴史記述が試み始められた。かれらが「新しい歴史家たち」と呼ばれるようになった。特にその中で、ベニー・モリスは最も代表的な修正主義学派と呼ばれている。

修正主義学派の論点を一言で要約すると次のようになる。すなわち、イスラエルの公式の見解では、パレスチナ難民はアラブ諸国の指導者の勧告に従って、自ら進んで出て行ったという言い方が一般的だった状況に対して、ベニー・モリスは、実はそういう事実は確認できないということを主張した。同時に、イスラエル側の史料から少なくとも積極的にシオニストの側がパレスチナ人を追放したとは言えない、しかし、少なくとも結果的にはそうなるような方向に仕向けていった、つまり、事実上、追放したのと同じと解釈できるような余地を残す言い方をしたのである。重要な点は公文書を使って主張したということである [Morris 1987]。この本がケンブリッジ大学出版局から英語で出版されたこともあいまって、シオニスト正統派—この場合、労働党を取り巻く研究者という意味であるが—からの反論が出て来て、それで論争が起こったのであった。

さらにバグダード生まれのイスラエル育ち、そしてイギリスで教育を受けたアヴィー・シュライム（オックスフォード大学セント・アントニーカレッジ教授、国際政治学）が、トランスヨルダンのアブドゥッラーとシオニストとの密約を暴き出す研究書を出版した。名付けて『ヨルダン川をまたぐ共謀』 [Shlaim 1988]。ただ、この問題に関しては、それまでアラブ側からそれなりの出版物はあった。例えば、サーイグという有名な歴史家が『パレスチナ問題とハーシム家』（アラビア語）を1950年代に書いた。この本は要するにシオニストとアブドゥッラーがずっと前から結託していた事実を暴露した本であったが、その本の影響もあって少なくともアラブ世界ではアブドゥッラーがイスラエル建国前からシオニストと秘密裏に接触していたというのは公然の秘密であった。シュライムは公文書を使ってイスラエルとヨルダン、ないしはシオニストとアブドゥッラーの関係は非常に緊密なものだったことを証明したのである。もちろん、現在に至るまで、シュライムの本はヨルダンでは発禁本の扱いとなっている。に

もかわらず、王室関係者、閣僚のほとんどは読んでおり、シュライム教授と故フセイン国王との個人的な関係は非常に良好だったと教授自身から私自身は聞いたことがある。

次のイラン・パペは現在、ハイファ大学に属しており、アヴィー・シュライムと非常に似た論点を展開している。つまり、イギリスのヨルダン外交に対して問題を提起した。シオニストとイギリスの関係は39年白書以来、最悪の状態だった。イギリスは国連分割決議において、一番責任がある立場でありながら、責任を回避する形でパレスチナ問題の解決案を国連総会に丸投げし、非協力的な形で傍観者で続けたということになっているが、パレスチナにイスラエルが建国されることを実はイギリスは黙認していた、とパペは主張した [Pappé 1986]。イギリスが考えたのは、ヨルダン・オプション、つまり、トランスヨルダンに東アラブにおけるイギリスの軍事拠点として、パレスチナ喪失に対する埋め合わせとするというものであった。シオニストたちがイスラエル国家をつくるのを黙認しながら、それに対抗するためにヨルダンを支援するというヨルダン・オプションという考え方を取った、と。したがって1948年の戦争—これはベニー・モリスとかアヴィー・シュライムの議論とつながってくるわけだが—をアブドゥッラーははじめからイスラエルと闘う気はなかった、と。それはグラブ・パシャというヨルダン軍最高司令官がイギリス人だったことにも関係している。結局、ヨルダン正規軍であるアラブ軍団は分割決議におけるアラブ国家予定地、つまり、現在のヨルダン川西岸を占領し、それ以上は進軍する気はなかったことを、公式の史料から明らかにしていった。

以上のようなイスラエル建国にまつわる3つの代表的な修正主義学派の研究が何をあらわしてるかと言えば、イスラエル建国は「ダビデのような小さな無力な人間が大きな強力な巨人に対して果敢に闘った」という比喻ではなく、強いイスラエルが勝つべくして勝ったんだという、非常に単純な結論を導いたことにあった。何故このようなことが問題になるのかと言うと、実はこの問いは次の議論につながって来ることになる。

ユダヤ人国家であるイスラエルを世界で差別される「弱者」と想定することによって、国際的な同情を集める、ある種の世論操作あるいは言説戦略があったと考えられるからである。

4. イスラエル建国神話をめぐる議論

以下において、ユダヤ民族に関する神話の解体の進行に関して議論していくわけであるが、まず、マサダ神話について言及してみたい。マサダと言えば、今、イスラエル有数の観光地になっており、死海の脇にロープウェイができて、頂上まで簡単に登ることができる。「マサダ・コンプレックス」と言えば、イスラエル人が敵であるアラブ諸国に常に囲まれているという危機意識をさしているわけであるが、常に包囲されながらも、マサダの砦に残った人々はローマ軍と勇敢に戦い、降伏することを潔しとせず、全員が玉砕したことをイスラエル国家が愛国心の表れとして顕彰するという政治神話である [Ben-Yehuda 1996]。

マサダ神話が成立したのはつい最近のことである。近代ナショナリズムの産物であるがゆえに、当たり前のことと言えば当たり前のことではあるが、シオニズム運動が胎動する19世紀終わり以降、形成された神話である。60年代において親イスラエ的な立場をとっていた研究者はだいたいイスラエルの政治的に孤立した心理を説明する時にマサダ神話を持って来る。つまりマサダ・コンプレックス、イスラエルは常に包囲されている、したがってイスラエル人は自分たちを守るために攻撃的にならざるを得ないという言い方をすることが多い。

私もヘブライ大学留学中、ウルパンというヘブライ語のコースに通った時に、当然のことながら、このマサダの歴史的事件が教材に取り上げられた。ところが、このマサダ神話の「マサダ」をよくよく検討すると、おかしなことになって来る。というのが、マサダの玉砕は一部のユダヤ人がローマに対して屈伏するというのをいさぎよしとせずとして自決した。地下水道に隠れていたものを除いて全員が自決した。ある種の玉砕ということで神話化され、美化されていくプロセスがシオニズム運動の発展過程で起こっていった。問題点は、圧政者に対して抵抗する英雄像というのが意図的に喧伝されていくことがマサダ的な神話形成の原点であったわけである。したがって、シオニズム運動、特に青年運動の中で何が行われたかと言えば、マサダの砦への行軍、つまり、マサダを登っていく訓練である。それが若いシオニストたちを教育するためのプランとして導入される。マサダの絶壁を登っていく過程を、ユダヤ人解放への道として位置づけて、その頂点で新しいユダヤ人世界、つまりシオニズム的な新しい世界があるという形で活用されていった。

同時にホロコーストの問題を考える時も重要な点は、イスラエルにおいてホロコーストがたんに犠牲者を哀悼するためだけの機会ではないことである。つまり、ホロコースト記念日の正式名称は「ホロコースト及び勇敢さ（英雄たち）のための記念日」

となっている。換言すれば、ホロコーストの犠牲者のみならず、ワルシャワのゲットーの中で、ナチスに対して蜂起した勇敢なユダヤ人たちをも同時に顕彰している。この事実は意外に忘れられている。シオニズムにとって、ディアスポラとは否定されるべき状態であって、離散状態をイスラエルに戻って来ることによって克服し、イスラエルで闘う勇敢なユダヤ人像をシオニストはつくり上げていった。この点を抜きにしてホロコースト神話を語ることはできない。

ところが、このマサダの神話にしてもホロコーストの神話にしても、途中から変化する。どのように変化するかと言うと、ナショナリストの立場からではなく、ユダヤ教の立場から再評価されていく。ディアスポラとイスラエルを結び付けていくような絆としてユダヤ教における死者への哀悼を通してホロコーストが議論され始めるのである。マサダにしても同じように、60年代前半に、発掘調査が始まったわけだが、この発掘の過程でマサダに抵抗のために閉じこもった人たちは実は大変敬虔なユダヤ教徒であったということが明らかになった。そのことによって今度はユダヤ教にとってホロコーストおよびマサダの意味が大きくなって来る。ユダヤ教の復興とともにこういう研究が生まれてくる土壌が形成されていった [Liebman et al 1983]。

次にユダヤ民族史観について議論してゆきたい。ユダヤ民族史観とは、ローマ軍による第二神殿崩壊以来のユダヤ人離散の歴史をいわばイスラエルの建国に至る解放のプロセスとして語るような歴史観である。つまりすべてユダヤ史をイスラエル建国という中で完結したものとして捉えていく姿勢あるいは立場を仮にユダヤ民族史観というふうに私は呼んでいる。このような語りを可能にしたのがまさに、シオニズムにおいてユダヤ人を政治的に能動的な勤労民族に変えていく政治的な操作と軌を一にする動きであったとも言える。

ところが、イスラエル生まれのテルアビブ大学のマイヤーズという歴史家はその著書『ユダヤ史の再創出』[Myers 1995]において、ホブズボームの「伝統の創出」などといった現代における新しいナショナリズム論の流れに乗った議論を行っている。ユダヤ人の過去の再創出あるいは再発明とでも表現できる事態、すなわちイスラエルにおけるユダヤ民族の言説形成のされ方を、ヘブライ大学の中におけるユダヤ研究所の研究を調査することによって、イスラエル建国の語りがいかに恣意的につくられていったのかを実証したのがマイヤーズの研究である。たしかに、結論としてはそれほどはっきりとしたことは導いていないのであるが、しかしながらイスラエル建国に収斂していく語りを非常に綿密に歴史家たちの言説の中に求めていったという点では、新しい研究動向であると言えるのである。

数少ない研究に言及したにすぎなかったが、それなりに重要な文献を紹介しながら全体の流れとしては、このような研究がイスラエルで生まれているという点を強調しておきたい。最後に紹介しておきたいのは旧約聖書の語りの問題である。これは、旧約聖書の解釈は19世紀の「ネーション・ステート」の概念を過去に投影しているという、ドイツを中心に起こった聖書学に対する批判である。このような問題点を指摘したうえで、逆に聖書をパレスチナ史として捉え返していくという試みを行っている。つまり、ユダヤ史としての古代ユダヤ国家ではなく、パレスチナという場で捉え返していくのである [Whitelam 1996]。

ウィストリッチとオハナが編集した研究書がある [Wistrich & Ohana 1995]。この本においてもイスラエルの政治・文化における神話化、そして歴史と記憶、あるいは記憶において歴史がいかに作りあげられているか、という諸課題が非常に深刻な形で議論され始めた。実はシオニズムはすでに解体したというのが識者における最近の潮流である。なぜかと言うと、労働シオニズムにおける世俗的なナショナリスト的な動きが破綻してしまった。具体的には労働党が1977年に政権をリクードによって奪われた事実にも呼応している。しかし、それ以上にシオニズムが元々持っていた語りは実はユダヤ教のタームをそのまま利用しながら、それを換骨奪胎しながら世俗的なナショナリズムの議論として語ってきた。それはユダヤ教をシオニズムの論理の中から排除していく議論を展開してきたが、67年の戦争の時に、東エルサレムの旧市街にあるユダヤ教の聖地「嘆きの壁」がイスラエル軍によって占領された。一部のユダヤ人にとってみれば、これは贖罪に向かってメシアがやって来るための一つのプロセスという考え方が一方で出て、ユダヤ教とシオニズムの関係の曖昧性というのが露呈してしまった。そのジレンマを、イスラエル国家の動向をどうするのかという問題を巡って将来像が見えてこない。つまり、ユダヤ教とナショナリズムの関係をどのように調整するのかという問題がイスラエルの中で深刻な問題として語られ始めている。それがポスト・シオニズムの状態なのである。

そういう中で、パレスチナ人の側からも自己主張が起こり、特にインティファダーと呼ばれる民衆蜂起がイスラエル国内のイスラエル人にとって非常に深刻なものとして受け止められた。もちろん、その後、1993年9月にパレスチナとイスラエルの間でオスロ合意が調印された。そのような一連の動きの中で、自分たちイスラエル人はパレスチナ人との関係をどういうふうに捉えていけばいいのかを依然として模索している状況である。政治的に和平合意はなったが、しかしながら日常生活の上でパレスチナ人たちと常に接触しているにもかかわらず、パレスチナ人はこれまでのシオニストの

公式的語りでは排除されてきた。それを今度、パレスチナ人を自分たちの語りに組み込もうとする試みが始まった。その時にあらわれてくる問題が今、深刻に議論されている。その新しい方向に向かって、「重層性」が問題にならざるをえない。私の場合、重層性という用語のイメージとして、むしろ地下に掘り下げていくのではなく、新しい思想を積み上げていくという、むしろ未来に向かっての営為と考えて、この「重層性」を考えようと思っている。

新しいアイデンティティーの形成ということで、地下に掘り下げて行って特定の地層に考古学的なレベルでその始原を正当化していく材料を発見するような議論ではなくして、未来に向かって新しい方向性を見出していくような、その新しい積み上げの状況、それを板垣雄三氏的な表現を使えば、人間とその集団の活動が主体として営まれることによって実現し、獲得されるような「地域」として問題化したいわけである。

【付録 質疑応答のまとめ】

○非常に未来志向の話で感激した。当然、後藤先生がおっしゃったように、重層的なアイデンティティーをお互いに共有していく可能性というか、そういうことがこれはイスラエルの中においても、実はご指摘のように、東洋系のユダヤ教徒とそうでないユダヤ教徒が将来的に重層的なアイデンティティーを共有していくような、そういう政治的可能性があるのかどうか、そういう点でたいへん興味深かった。幾つか話の点が浮かんできたが、板垣先生だけが引用されているが、大岩川さんがやられていた、重層的な地域の捉え方として、幾つかの模索的な研究からイスラエル研究をパレスチナ研究として捉えようとしたことに、どういうコメントがあるのかお聞きしたい。

もう一つは、パレスチナ研究というのは、アラブ研究側からこのような問題を捉える場合、それぞれ起こっている歴史の見直しというような動きが、それに対応するようなものが果たして、アラブ側とかパレスチナ側にもあるのか。構造云々というようなことをおっしゃったが、それはアラブにおけるこういうパレスチナ問題理解と対比させようとしていたのではないかと思う。今まで支配的なアラブ民族主義に代わって、実はさまざまな小集団に分かれるような、そういう重層的なアイデンティティーの構図があるのか、ないとしたらどのようなことが一体考えられるのかということをお聞きしたい。

白杵 まず後者のアラブ、つまり、パレスチナ人の中における研究動向はどうなっているのかという点であるが、新しい傾向として、私が最近注目しているのが、パレスチナにおける女性研究であり、この女性研究に関する本がインティファダ以降、どんどん出版され始めている。やはり民族主義の名において、女性の従属が正当化されてきたというか、言わばパレスチナ解放運動の中で女性が、ある種の「英雄」化するというか、フィダーイーになっていく。それは、闘う女が民族主義の言説の中に全部、収斂されてしまったという側面があった。最近、何が問題にされているかという、これはピブリオグラフィーも出ており、家父長性の問題が当然出て来る。家父長性の問題をどう捉えるかということが今、起こっているような気がする。つまりインティファダが終わり、そしてパレスチナが将来的に国家に向かって進んでいく時に、女性をどう考えるかという問題が一方であるのではないか。

同時にアラブ研究というよりも、それまでのパレスチナ人の中に、イスラエル人との対話の中から新しいものをつくり出していこうという動きが感じられる。特に一番新しい動向として注目すべきなのが、元々、ガリラヤ地方に住んでいたパレスチナ人が東エルサレムに数多く住み始め

ている。その中で、彼らがある種の主導権を持ちながら新しい学派が形成されているような印象を持っている。彼らはほとんどイスラエルの大学で教育を受けて、また先ほど指摘したようにヘブライ語も使える。そういう人たちの中に新しい動きが出てきて、旧来のパレスチナ民族主義とは若干違う位相から何か新しいものをつくり始めているのではないかという印象は持っている。

大岩川和正氏の議論をどういうふうに評価するかという点だが、実はこれは、先ほどから申し上げている『地域研究論集』に書いた論文〔白杵 1997〕がまさに板垣・大岩川の両氏を前面に押し出して議論しているので、関心のある方はそちらを読んでいただきたい。やはり大岩川先生の議論の中で一番重要だったのは、確かにパレスチナという地域の中において問題にしなればいけないという点である。私が書かせていただいた大岩川論〔白杵 1995〕を念頭に置かれて、皮肉を込めて質問されたものと思う。大岩川氏は非常に早くからキブツ、モシャーフという、物質的な基盤としての入植村を取り上げることによって、言わば宇宙論的な小宇宙としてのキブツの中におけるある種の自己完結的な世界観、それがまさにシオニズムなんだというところから、パレスチナ人という他者を導入することによって、それを批判していくという、そういう語りだったと考えている。大岩川氏がユダヤ民族史観の批判として位置づけた点が、私の一番彼を評価する点であるということだ。彼の場合はたんにイデオロギーの問題ではなく、物質的基盤の方に下りていったということが重要ではないかと思っている。

○神話の解体の進行という点で、たしかにいろいろ出版物が出て来たことは分かったが、それはどの程度なのかという点と難しいだろう。イスラエルの中に神話の解体を共有する部分があるのか。

白杵 おそらくイスラエル社会が分裂する要素として、これは当然機能するという点であって、決して一般のイスラエル人にとってみれば、歓迎されるような傾向ではないと思う。というのは自分たちがやはりここに住んでいるのは正当なんだとみんな信じていることを内部から解体するような議論であるから、この新しい潮流は決して広く受け入れられるわけではない。しかしながら知識人のサークルの中では確実にこういう議論は浸透している。そのずれがどんどん大きくなっていった時に、一体、どうなるかが深刻なのではないか。逆に「新しい神話」をつくり上げなければいけないという状況が当然あるわけで、その神話づくりを政府は一生懸命やろうとするのだけれども、うまくいっていない。だからみんな、その漠然としたいらだちの矛先をポスト・シオニズムと言っている状況があるのではないかと思う。

○パレスチナ解放戦線の今までの軌跡というものを見直すというか、捉え直すということは、全く出て来ていないのか。

白杵 そこが微妙なところだと思う。それは非常に難しいことで、やはり自分たちの分析の中に、パレスチナ人というアクターを取り入れるということはできるけれども、イスラエル人の立場からパレスチナ解放運動を再評価するような新しい動きはまだ出てないようだ。あくまで主体がイスラエル人である事実をどう考えるかというところから出発しているので、なかなかそこまではいけないのではないか。戦略的な研究としては進んでいるが、それはあくまで距離を置いた研究であろう。客観的とまでは言えないが、少なくとも距離をおいた、非常に政治的意図を持った研究であるということと言えるだろう。

○いつを称してシオニズムが終焉したと見ているのか。

白杵 終焉したと言うよりむしろ、ある種の役割が終わったというのは67年の戦争とされている。

○今、どれぐらいシオニズムへの関心はあるのか。

白杵 今、「あなたはシオニストか？」と聞いて、「そうだ」という人はほとんどいないだろう。

○建国になった時でも、ユダヤ人という概念があったのかどうかということはおくとして、ユダヤ教徒の中の17パーセント、20パーセントぐらいしかいなかったが、それでもポリティカル・シオニズムができて、国家ができた。今、イスラエルという国民意識ができて、この後どうなるのかということだが、その時にそれでは宗教シオニズムとどうなっているかという問題もあるし、ユダヤ民族という民族史観になってくるとアメリカなどでは500万あるいは600万いる。これでキリスト教徒と結婚してユダヤ教徒はどうなるんだという話が出て来る。イスラエル国家ができた時にも誰がチーフかという問題はあった。そういった点からは、アイデンティティーという形で見たら、幾つものものが重なって、ロシアからも入って来ている。何か新しいものができるのか、できるとすれば何を基準、基礎にするのか。例えば宗教なのか文化なのかイデオロギーが来るのか、その点についてお考えをうかがいたい。シオニストはいないが、例えばエルサレムにシオニスト会館がたくさんある。我々などが会議に行くと、最後はシオニスト会館に連れて行かれて、夕食になる。決して自称シオニストはいないが、やはりシオニズムに対する愛着というか、それは非常に強くあるのではないか。それを否定してしまったら、国家そのものを否定することにならないだろうか。

白杵 イスラエルに住んでいる、あるいは少なくとも移民して来たという事実によって、彼らはシオニズムの中における一つの世界を共有している。だからシオニストと言わなくてもそんなのは当たり前なんだという、あまりにも自明のことだからシオニズムだ、シオニズムだとは言わない、そういう側面もあると思う。表立って言わないというのは感覚的に共有されているということかもしれない。

○神話の社会的背景というか、それはどういうイメージがあって書かれたのか。というのは、トルコでは大都市の上流中産層から上流階級出身者の中で新自由主義史観というのが出てきており、従来の公定的ナショナリズム史観をかなり批判的に見て、一方でもちろんイスラム主義史観に対してかなりはっきりした答えを出そうとしている。社会的背景と人間類型について、イスラエルではどうか。

白杵 おそらくベニー・モリスは、父親がドイツ系で、中産階級の上だと思う。アヴィ・シュライムはイギリスに移民したイラク系ユダヤ人の末裔で、おそらく大変な金持ちで上流階級の方に属するように思えるが、イスラエルに移民して来ているが、イスラエル人意識をもっているわけではないようだ。イラン・パペは、一説によればイスラエル共産党の党員だったと言われる。この人物はやや特殊かもしれない。イスラエル生まれの世代がもう主流を占めているので、非常に多くの言語を駆使するヤコブ・ランダウ先生（エルサレム・ヘブライ大学歴史学教授）のようなタイプの学者はどんどん少なくなっているが、それにしても今、一番主流を占めているのは英語圏から来た研究者で、大きな力を持ち始めている。

○今、エルサレムがイスラムの聖地になってることはよく言われるが、歴史的に根拠はあるのか、もちろんエルサレムを讃えるようなフレーズもあるが、それが出来たのはいつごろのことなのか。パレスチナもかなり神話化されている部分があるかと思うが、それは最近のイスラム主義の関わりの中でむしろ強まる傾向もあるのではないかと考えている。今回の発表の中ではイスラムの要素はほとんど出て来なくて、ユダヤ人にとってのパレスチナという言い方をされるが、ムスリムにとってのパレスチナという使い方もある。ユダヤ人という、あるいはイスラエル人でもいいが、ある意味ではイスラエル人であると同時にヨーロッパ人である、あるいはアメリカ人であるという、そういうユダヤ人もたくさんいる。今回の重層性の問題とも絡むところだが、こうした人々をどういうふうにしてイスラエル人・ユダヤ人と呼んでいいのか、英語を話すイスラエル人の割合なども含めて、もう少し聞かせていただきたい。

白杵 大変難しい問題だが、やはりエルサレム問題が出て来るのは、シオニズム以降ではないか。19世紀末以降のナショナリズムの一つの象徴化の過程で出てきた言い方ではないかと思う。おそ

らくそれ以前においては、今のような言い方はされていなかった。特にエルサレムが強調されるようになるのは67年以降の話で、アラファトはそれを最大限に利用しているという側面はあるだろう。

エルサレムの問題は、アメリカから見ると、国際化、つまり、エルサレムはある種のアジールの位置づけをしようという意図で、エルサレム問題は常に国際的な問題の焦点になっている。東方問題以降のエルサレムの国際化過程とそこに住んでいる人間がどういふうに対応しているか、きちんと調べていかないと、微妙な問題で分からないというのが率直なところである。呼称の問題でも鋭い指摘を受けたが、今日はあくまでイスラエルの中における一部の動向をご紹介し、そこから逆照射していくということを議論の前提にしているので、今後の課題としたい。

英語を話す人間がどのぐらいいるのかという点だが、ジェルサレム・ポスト (*Jerusalem Post*) という英語紙が2万部か3万部売れていると言われている。外国人を除いたとして、常時読んでいる人がそのくらいいる。この新聞が成立しているという事実は、やはり英語圏から来ている人が多いということも背景にしている。国際的に発信するという意味もあるが、むしろ英連邦を含む英語圏から来たユダヤ人たちが読むための新聞でもあるわけで、そのことを考えると潜在的な人口はもう少し多いかもしれない。

○出身国別の統計は公表されているのか。

臼杵 第2世代以降はサブラという言い方で、イスラエル生まれと分類される。3代目になると、出身地項目がなくなってしまう。従って第1世代の父親がどこから移民してきたかということは言うが、それ以降になるともう統計上消えていく。イスラエル生まれがどんどん増えて、統計には出て来ない。3代目になってしまうともうイスラエル生まれだけになってしまうので、分からないというのが現実だろう。

○ムスリムにとってのパレスチナ神話に関して、確かにエルサレムは特別な位置を占めていないが、歴史的にはやはりウマイヤ朝時代には特段の位置を占めていたのではないか。というのは、岩のドームができたり、ムアーウィアがアリーに対抗してエルサレムで即位式をやっている。いろいろなイスラム法話ができてくるのは、その時代である。イスラムの初期においてはエルサレムは非常に重要な都市だったのではないか。それが19世紀、オスマン朝がわざわざエルサレムを中心としたサンジャクをつくりだすという時点から、やはり神話が復活して来るのだろう。それなりに重層的なのでは？

臼杵 オスマン朝時代にはエルサレムはダマスカスなどの都市と違って、クドゥス・シャリーフと必ずつけて呼んでいるので、普通の町ではない。マッカ、マディーナほどのものではないかもしれないが、やはり宗教的プレステージのある町だという認識を持っている。

○パレスチナ人は、フィリシテ人は別にして、近現代史ではいつから出てきたのか。つまりそういうアイデンティティーはないのでは？イスラエルも、パレスチナという呼称を取るかどうか分からないが、アラブ人の方でもそういうアイデンティティーとしてパレスチナというのを取って来るのではないのか。

臼杵 今、ちょうどパレスチナ・ナショナリズムの起源ということで、一つの議論がまた起こっているようだが、その時もやはりアラブとどうやって差異化していくかという問題が一番ポイントになって、67年以降明確になってくるのではないか。それまでは先ほども述べたが、アラファトも非常に曖昧な表現しか使っていない。アラブとパレスチナを互換的な言葉として使っているのである。

○あそこに住んでいる住民にとっては別にパレスチナでもイスラエルでもないわけである。そう

白杵 パレスチナ／イスラエルにおける地域の重層性

いう意識がずっと続いているはずだが、そこにどういふ新しい文化が出て来るのか。

白杵 その根はある。フィラスティーンというアラビア語の言葉は地域名としてはずっともう一貫して古くからあるのだから。明確な領域を持った地域として認識するのはイギリスの委任統治時代以降である。

○しかしエスニックとしてはないのでは？

白杵 エスニックとしてはもちろんない。一つの地方集団である。ただ、難民に関しては別だと思ふ。つまりレバノンやシリアに行った難民はあくまで外側からパレスチナ人として規定されているからである。ただ問題になってくるのは、イスラエルや、ヨルダンにいた人々をどういふふうにかえるかだろう。

○逆に言えば、イスラエルに来たユダヤ教徒の人たちも、現在、イスラエリーと言われている人たちも、それを使うことができるのか。

白杵 それは難しいと思ふ。

○つまりそういうパレスチナという文化がずっと続いているならば、新しくイスラエル人になった人たちは、それなりの文化を持っているわけである。それがどこで錯綜して共有されているのか。

白杵 委任統治期には皆、パレスティニアンというふうに呼んだと思ふが、イスラエル建国以降はそういう使い方をされなくなってきて、むしろユダヤ人の中では排除されていく方向に向かったというのは間違いないだろう。

○修正主義学派の人たちは、新しい歴史を何と呼んでいるのか、ユダヤ史か。

白杵 イスラエル史と呼んでいる。ユダヤ史という言い方は彼らは絶対しない。それはもう若い世代の人たちは自分たちをユダヤ人ではなく、イスラエル人だと言っているからである。

○ということは、イスラエルとは、ユダヤ人の国家というよりも、ユダヤ人とパレスチナ人の国家であるということか。

白杵 二つの極があつて、ユダヤ人の民族国家としてのイスラエルと、民主国家としてのイスラエルがあつて、そのせめぎ合いである。いわゆるハト派の人たちは、器としてのイスラエルということしか考えていない。つまり民主国家としてやっていく、だからそこには当然イスラエルのパスポートを持ったアラブの市民も入っている。その時には当然、この二つの極があつて、その間にいろいろな流れがあつて、つばぜり合いが今、起こっている。だから純粋に民主国家だけにしてしまうと、それではシオニズムとは何だったのかというようなことになって来て、それは否定されるし、また逆にユダヤの方にスライドしていくと、最終的にはユダヤ教が実現したユダヤ教国家という逆の極になってしまうから、結局民族主義がそこで抜け落ちて、宗教だけになってしまうという、そういう非常に微妙なバランスの上に立っていると書いていいだろう。両極があつて、一方はイスラエル共産党が民主国家にしると言っている。他方、一部のラビはユダヤ教国家にしると言っている。そういう両極の間にいろいろな人たちがいるということだと思ふ。

○そうすると、修正主義学派でさらに民主主義派であるということだと思ふが、その思想とはどのようなものなのか。

白杵 そこまで言っているのかどうか分からないが、一言で言うならやはり非常に西洋的な価値観を重視しているというのは間違いないと思う。

○例えばアジアの例でいえば、インドネシアなどは宗教的多元主義だが、そういう可能性はないのか。

白杵 先日ハルヴェイ・ゴールバーグというイスラエルの人類学者が来日した。非常に敬虔なユダヤ教徒だが、彼はある意味では、アメリカン・ジュダイズムの非常に自由主義的な解釈をしているが、信仰はきちんと遵守している。もちろん、なおそれを急進的なリベラリズムで解釈していくような方向性を持っている人もいるが。アメリカン・ジュダイズムも、それがイスラエルの中に導入されて来るとどうなって来るのかという問題は別として、一つの可能性としては、それが核になっていることは間違いないだろう。イスラムについてはよくわからない部分が多い。

○イスラエル神話、あるいはユダヤ民族神話の解体について、新しい時代とおっしゃったが、アブラハム・レオンなどの系統はスパッと切れているのか。

白杵 やはりマツベンなどの、要するに日本で言えば広河隆一さんらがコミットしたようなグループというのは、あくまで新左翼の問題で出て来て、レオンなどもその流れの中に位置づけられるから、新左翼の歴史とイスラエルをどう考えるかという問題になる。ノーム・チョムスキーもその流れと言っていると思うし、そういう流れはずっとあって、今までのパレスチナ人との連帯運動はその部分の人たちに担われていた。例えばエドワード・サイドとチョムスキーが重なって来るのはそういうところの流れを共有しているのである。従って、現在のは全く新しい流れで、レオンなどのひとつの政治運動としての系統はほとんど切れていて、アカデミズムの中から出て来ている。だからこそ重要である。

○アラブ側ではエドワード・サイドなどがやっているのか。

白杵 ずっとそこで接点はあった。特にイサカ・プレスで出している本などを見かける。その流れとしてアキヴァ・オールら、ユダヤ人側の知識人もそうだった。その流れとも全く違う。

○ユダヤ民族神話というのは、もっと前から既にあつたものだが、なぜこの時代を取り上げたのか、特別な意味があるのか。

白杵 外ではなくイスラエルの中から出て来ているからである。あくまでマージナルな政治的な運動として、例えばドイッチャーなどによるシオニズム批判もあるわけだが、それは連続と続いていることは間違いない。ただ、イスラエルの中でそれもエスタブリッシュメントといわれるような人の中から出て来ているということがむしろ重要である。

参考文献

Ben-Yehuda, Nachman

1994 *The Masada Myth: Collective Memory and Mythmaking in Israel*, Madison: The University of Wisconsin Press.

Boyarin, Jonathan

1995 *Palestine and Jewish History: Criticism at the Borders of Ethnography*, Minneapolis and London: University of Minnesota Press.

Davis, Uri

1987 *Israel: An Apartheid State*, London: Zed Press.

白杵 パレスチナ／イスラエルにおける地域の重層性

Flapan, Simha

1987 *The Birth of Israel: Myth and Reality*, New York: Pantheon Books.

板垣雄三

1992a 『石の叫びに耳を澄ます—中東和平の探索—』平凡社

1992b 『歴史の現在と地域学—現代中東への視角—』岩波書店

Liebman, Charles S. and Don-Yehiya Eliezer

1983 *Civil Religion in Israel: Traditional Judaism and Political Culture in the Jewish State*, Berkeley, Los Angeles and London: University of California Press.

Morris, Benny

1989 *The Birth of the Palestinian Refugee Problem, 1947-1949*, Cambridge: Cambridge University Press.

Myers, David, N.

1996 *Re-Inventing the Jewish Past: European Intellectuals and Zionist Return to History*, New York and Oxford: Oxford University Press.

大岩川和正

1993 『現代イスラエルの社会経済構造—パレスチナにおけるユダヤ人入植村の研究—』東京大学出版会。

Pappé, Ilan

1985 *Britain and the Arab-Israeli Conflict, 1948-1951*, London.

Ram, Uri

1995 *The Changing Agenda of Israeli Sociology: Theory, Ideology and Identity*, New York: State University of New York Press.

Shafir, Gershon

1989 *Land, Labor and the Origins of the Israeli-Palestinian Conflict, 1882-1914*, Cambridge: Cambridge University Press.

1997 "Preface to the Paperback Edition" in *Land, Labor and the Origins of the Israeli-Palestinian Conflict, 1882-1914*, Berkeley, Los Angeles and London: University California Press.

Shalev, Michael

1992 *Labour and the Political Economy in Israel*, New York: Oxford University Press.

Shlaim, Avi

1988 *Collusion across the Jordan: King Abdullah, the Zionist Movement, and the Partition of Palestine*, Oxford: Oxford U. P.

Shohat, Ella

1989 *Israeli Cinema: East/West and the Politics of Representation*, Austin: University of Texas Press.

Silberstein, Laurence J.

1990 *New Perspectives on Israeli History: The Early Years of the State*, New York, New York University Press.

1999 *The Postzionism Debates: Knowledge and Power in Israeli Culture*, London: Routledge, 1999.

Swirski, Shlomo

1989 *Israel: The Oriental Majority*, London: Zed Press.

白杵 陽

1994 「イスラエル建国、パレスチナ難民問題、およびアブドゥッラー国王—1948年戦争をめぐる「修正主義」学派の議論を中心として—」『大阪外国語大学アジア学論叢』第4号、183-216頁。

1995 「現代パレスチナ・イスラエル研究へのプロローグ—故大岩川和正氏の業績をめぐる—」長沢栄治編『現代中東の民族と民族主義—資料と分析視角—』アジア経済

- 研究所、11-40頁。
- 1996 「イスラエルとホロコーストの記憶—「国民」と「民族」の相克—」『現代思想特集 想像の共同体』第24巻9号、213-223頁。
- 1997 「パレスチナ／イスラエル地域研究への序章—イスラエル政治社会研究における<他者>の表象の諸問題—」『地域研究論集』第1巻第1号、国立民族学博物館地域研究企画交流センター、67-91頁。
- 1998a 「イスラエル建国50周年 真剣な議論が始まったポスト・シオニズム論争」、『アラブ』84号、日本アラブ協会、14-16頁。
- 1998b 「イスラエルにおける「修正主義」—「歴史家」にとっての戦争、イスラエル建国、そしてパレスチナ人」、『歴史学研究』第712号、歴史学研究会、17-25頁。
- 2000a 「現代イスラエル研究における「ポスト・シオニズム」的潮流」『中東研究』第460号、中東調査会、23-29頁。
- 2000b 「犠牲者としてのユダヤ人／パレスチナ人を超えて—ホロコースト、イスラエル、そしてパレスチナ人」、『思想』第907号、岩波書店、125-144頁。
- Wistrich, Robert and Ohana David
 1996 *The Shaping of Israeli Identity: Myth, Memory and Trauma*, London: Frank Cass.
- Whitelam, Keith W.
 1996 *The Invention of Ancient Israel: the Silencing of Palestinian History*, London and New York: Routledge.
- Zarubavel, Yael
 1995 *Recovered Roots: Collective Memory and the Making of Israeli National Tradition*, Chicago: University of Chicago Press.

追記

本報告を行ってからバーナード・ルイスが『中東の重層的アイデンティティ』という本を出版した。(Bernard Lewis, *The Multiple Identities of the Middle East*, New York: Schocken Books, 1998.) 本研究会のテーマ設定はルイスに先立つものであることを明記しておきたい。この著作については別の機会に論じることとする。また、筆者自身、本報告後、本報告に直接関連するテーマでいくつかの論文を執筆した。参考文献を参照されたい。